

# オクシモロンの解釈過程について

田岡 育恵

情報科学部 情報メディア学科  
(2018年5月31日受理)

## On the Interpretation Process of Oxymoron

by

Ikue TAOKA

Department of Media Science,  
Faculty of Information Science and Technology

### Abstract

Two semantically incompatible expressions are merged in an oxymoron making their combined literal meaning inconceivable. However, the oxymoron can make sense and can even be an interesting use of word. I will clarify the reason why the combination of semantically incompatible expressions does not lead to a clash of meaning. The two opposing expressions in an oxymoron are based on different perspectives respectively, such as the first expression being from a physical perspective and the second psychological. This difference in perspective can solve the problem of their literal disagreement. As well as the different perspectives involved, the order of the expressions is essential in producing an effective oxymoron. The first part of an opposed pair invokes a certain expectation associated with it, but this expectation is instantly denied with the opposing meaning of the second part. The contrast between the two parts should be strong enough to make the observer find it interesting. Moreover, for the observer to appreciate such a twisted use of words depends on whether they have experienced a gap between the expectation suggested by the first part of an oxymoron and the reality in their culture suggested by its second part. That can be the basis for understanding an oxymoron.

**キーワード** ; オクシモロン, 期待, 語順, 文化と言語

**Keyword** ; oxymoron, expectation, word order, culture and language

## 1. はじめに

レトリックの1つにオキシモロンと呼ばれる用法がある。(1)がLeech (1969:132)によるオキシモロンの定義である。

(1) OXYMORON: The yoking together of two expressions which are semantically incompatible, so that in combination they can have no conceivable literal reference to reality: ‘my male grandmother’; ‘a true lie’; ‘a philatelist who doesn’t collect stamps’<sup>1)</sup>

これによれば、オキシモロンとは、意味的に相容れない2つの表現が組み合わされ文字通りに解釈すると訳の分からない表現ということになる。

しかし、訳の分からない表現であるのなら、このような用法が認められるはずはなく、現に我々はこのように一見、矛盾した表現の意味を理解し、更にはその表面上の矛盾を楽しんでいるとすら言える。本稿では、このオキシモロンの解釈過程について考えていきたい。

先行研究の中には、オキシモロンの分類に言及しているものがある。たとえば、森(2002)では、トートロジーの裏返しとして説明できるもの(例:大学じゃない大学,公然の秘密)、両方またはどちらか一方の語が比喩的な拡張をしているがために矛盾が解消されているもの(例:冷たい炎,若年寄)、同じ事態を違った視点からみており、そのおのおのが別個にカテゴリーをかぶせているために、矛盾がそもそも生じていないもの(例:遠くて近い(仲),慇懃無礼)の3つに分けている。<sup>2)</sup> 有光(2011)では、名詞+名詞のタイプ、形容詞+形容詞+名詞のタイプ、文章のタイプに分けている。<sup>3)</sup> また伊藤(2013)は、メタファー、オキシモロン、矛盾文を *opposed terms* の階層性に基づいて分類している。<sup>4)</sup>

筆者の関心は、オキシモロンの解釈過程そのものにあるので、このような分類については、ここでは言及しないことにする。

佐藤(1987:223)は、オキシモロンについて次のように述べている。<sup>5)</sup>

(2) 見かけ上矛盾している対義項どうしが、じつは真正面から対立しているのではなく、それぞれにニュアンスを変えて微妙に両立し合っている。

大森(1994:66)は、佐藤が言うような、見かけは矛盾する意味の微妙な両立について、次のように述べている。<sup>6)</sup>

(3) 固定的な言語に、そういう柔軟な性質の意味を担わせるのは、認知の働きである。

そのような認知の働きについて、本稿でより具体的に示したいと思う。

## 2. 先行研究

ここでは、オキシモロンにおける意味の構造について述べている先行研究を振り返り、同意するところは例を補足して同意し、先行研究で言及していないと思われるところはその部分を指摘したい。

瀬戸(1997:59f.)は、「遠くて近い(仲)」のようなオキシモロンの例について、(4)のように述べている。<sup>7)</sup>

(4) オキシモロンは、どうして意味的な矛盾に陥らないのか。「遠くて近い(仲)」のような例では、実は、意味的な共通軸が一本ではなく二本に分かれている、と考えられなくもない。共通軸の「距離」が、「遠くて」に対しては「物理的距離」、「近い」に対しては「心理的距離」というように。すると、「遠くて近い」には矛盾は存在せず、一貫した解釈が成り立つ。

更に、瀬戸(1997:60)は、その2本の意味的な共通軸は必ずしも「物理的」と「心理的」の対立では

ないと、(5) のように述べている。<sup>8)</sup>

(5) しかし、このようなオキシモロンの脱オキシモロン化は、あまりにも合理的で理知的すぎる。「遠くて近い」で対立関係にあるのは、「物理的距離」と「心理的距離」に限らないだろう。「物理」と「物理」、「心理」と「心理」との対立も考えられる。また、「距離」をその両様に受け止め、比喻的意味と文字通りの意味とが混然一体となって、一本の意味軸上で対立しながら融合するという理解も成り立つ。

瀬戸は「物理」対「心理」に限るのではないと述べているが、筆者の見つけた例の中にも次のようなものがあつた。(6) の「ほ」は穂村氏、「若」は若者を表す。下線は筆者による。

(6) 例えば、若者たちがズボンをずり下ろして穿いている姿を見ると違和感を覚える。気持ち悪いなあ、と思う。だが、これを生理的嫌悪と決めつける前に、念のために彼らの真意を確認してみることにする。

ほ「どうしてそんな風に穿くの？」

若「恰好悪いからです」

ほ「え？ 恰好良いと思ってやっているんじゃないの？」

若「はい」

ほ「どうしてわざわざ恰好悪くするの？」

若「恰好悪いのが恰好良くて、恰好良くする方が恰好悪いんですよ」

話がズレまくっているようで、そうでもない。その感覚はわかる。

(穂村弘『君がいない夜ごはん』)<sup>9)</sup>

下線部「恰好悪いのが恰好良くて、恰好良くする方が恰好悪いんですよ」はオキシモロンになっているが、「恰好悪い」、「恰好良い」はともに心理的なこ

とである。しかし、下線部の2つの「恰好悪い」、2つの「恰好良く」は、それぞれ異なる視点からの評価である。「恰好悪いのが恰好良くて」の「恰好悪い」と、「恰好良くする方が恰好悪いんですよ」の「恰好良くする」は、ともに世間一般の標準的な視点での評価であり、「恰好悪いのが恰好良くて」の「恰好良くて」と「恰好良くする方が恰好悪いんですよ」の「恰好悪い」は、ともにこの若者の視点からの評価である。視点が違うので、文字通りには矛盾する表現が解釈上は矛盾せず、我々は難なく表現を理解できる。

次に、森(2002)の分析を紹介する。<sup>10)</sup> 森は、オキシモロンをトートロジーに関連づけて考察する佐藤(1987)を踏襲している。<sup>11)</sup>

(7) a. 日本には物資がなくなり、戦争はますます拵がっていったが、この年の春もやはり春だった。いつの間にか柳が芽をふいて、なまぬるい風のなかに桃が咲きはじめた。

b. いつの間にか柳が芽をふいて、なまぬるい風のなかに桃が咲きはじめた。しかしこの年の春はもはや春ではなかった。日本には物資がなくなり、戦争はますます拵がっていったからである。

(8) a. 梅田の広場はあかるい陽ざしが注ぎ、街路樹に少しだけ、みどりの芽が吹きだしていた。中国では日本はながい戦争をつづけていたが、日本の春はやっぱり春だった。

b. 梅田の広場はあかるい陽ざしが注ぎ、街路樹に少しだけ、みどりの芽が吹きだしていたが、日本の春はすでに春ではなかった。中国では日本はながい戦争をつづけていたのである。<sup>12)</sup>

(7)、(8) のそれぞれ a がトートロジー、b がオキシモロンの例である。森(2002: 121) が基づく坂原のトートロジーについての見解を紹介する。坂原は、

(9) について (10) のように述べ、そこで述べられる  
緩いカテゴリーときついカテゴリーの存在を前提に  
して、(11) のようなトートロジーが存在すると述べ  
ている。<sup>13)</sup>

(9) 飛ばないトリなど、トリではない。

(10) われわれは、カテゴリー所属と、典型性を別の  
基準を使って判断している。「飛ばないトリ」に  
現れているトリのカテゴリーは、定義属性だけを  
満たせばよい、緩い判断である。一方、述語「ト  
リではない」に現れているトリのカテゴリーは、  
定義属性と特徴づけ属性（その全部とは言わない  
までも、少なくとも、飛ぶという属性は含まれる）  
の両方を満たす必要のあるきつい基準で判断さ  
れたトリのカテゴリーである。

(11) 飛ばなくても、トリはトリだ。

森（2002：120f.）は、佐藤のあげた例からトート  
ロジーを取り出すと次の（12）、（13）になるが、こ  
れらも「きついカテゴリー」からははずれる周辺の  
メンバーである「春<sub>1</sub>」でも緩いカテゴリーである  
「春<sub>2</sub>」には入るということを確認するという点で  
意味のある表現となっているのだと述べていて、ト  
ートロジーを裏返したオクシモロンも「きついカテ  
ゴリー」と「緩いカテゴリー」の存在を背景にして  
成り立つ表現だと述べている。<sup>14)</sup>

(12) この年の春<sub>1</sub>もやはり春<sub>2</sub>だった。

(13) 日本の春<sub>1</sub>はやっぱり春<sub>2</sub>だった。

(14) この年の春<sub>1</sub>はもはや春<sub>2</sub>ではなかった。

(15) 日本の春<sub>1</sub>は既に春<sub>2</sub>ではなかった。

（14）、（15）は、周辺のメンバーである「春<sub>1</sub>」が、  
プロトタイプメンバーによって構成される「きつい  
カテゴリー」である「春<sub>2</sub>」には入らないということ  
を確認した文になっていて、トートロジーと同様の  
図式のもとでオクシモロンも理解できる。ただ、述

部に来る「春<sub>2</sub>」が「きついカテゴリー」か「緩いカ  
テゴリー」かの違いがあるだけだというのが、森の  
見解である。

このカテゴリーの差異というのは、言及する対象  
についての視点の違いと言えるだろう。筆者は、表  
面上、形式が同じ表現であっても、対象をとらえる  
視点の違いによってナンセンスではない表現として  
成立するという考えに同意する。

これについて、更に補足しよう。森田（2006：109f.）  
は、例（16）については（17）のように、例（18）に  
ついては（19）のように述べている。<sup>15)</sup>

(16) 電話を掛けたけれど、掛からなかった。

(17) 他動詞「掛ける」行為の結果、自動詞「掛かる」  
が自動的に成立するかということ、そうではない。  
電話を掛けたにもかかわらず、掛からない場合は  
いくらでもある。行為と結果が連動しない。掛け  
る段階と掛かる段階とは切り離された別個の事  
態なのである。難しく言えば、掛けるという行為  
の視点と掛かったというときの視点とが異なっ  
ている。二つの視点の並列である。したがって、  
ある視点でとらえた情況が、別の視点での情況と  
一致しなくて当然である。というわけで、右の文  
（筆者注、「右の文」とは（16）のこと）は十分成  
り立つ日本語なのだ。

(18) 大学を受けたけれども、受からなかった。

(19) 受験を眺める視点と合格発表を考える視点と  
は、当然切り離されている。

これに対して、（20）は非文であり、その理由を森  
田は（21）のように説明している。

(20) \*机を窓から外に出したけれど、出なかった。

(21) 出すこと、すなわち出ることであるから、まだ  
出していない段階では、出したことにはならない。  
「出す」という行為者の側に向けられる視線と、  
「出た」という机の側に向けられる視線は表裏一

体で、別個のものではない。

オキシモロンが適切な意味を持つ文として成立するのは、視点の相違が認められるからである。異なる視点が考えられない場合は、単に反対概念が共起していても、それはオキシモロンではない。瀬戸（1997：61）は、(22)のように述べている。<sup>16)</sup>

(22) 「明暗」は、「明と暗」にほぼ等しい。単なる並置にすぎず、意味は対立したままである。両者は対立項を結合させるだけの意味エネルギーを内部に蓄えていない。オキシモロンとして対義語が融合するには、対義語が活性化し、意味エネルギーの急激な高まりが生じなければならない。

瀬戸が言うように、反対の意味が共起しているがオキシモロンにならないというのは、「白黒」、「賛成反対」も同様である。「明暗」、「白黒」、「賛成反対」では、1つの対象について、同時に相反する形容が付与されるということではなく、対象がそのどちらかに分けられるということだからである。ある対象を評価するのに、同時に反対の評価が与えられて矛盾するという事にはならない。

しかし、これが同じ形容でも程度を変えると、オキシモロンが成立すると思われる。

(23) 白だけれど、(よく見れば) 白というのでもない  
(白だけれども、真っ白というわけではない)。

(24) 賛成したが、(実は) 賛成というのでもない (賛成だが、100%賛成というわけではない)。

つまり、同じ形容でも、その度合いにより異なる視点を表すということになり、オキシモロンが成立する可能性がある。

以上、先行研究に言及しながら、オキシモロンが成立するためには、2つの異なる視点が関わっていることが必要であるということを確認した。

では、先行研究では言及していないと思われることについて触れたい。有光（2011：249）は、(25)はよいが、反義語の出現順を替えた(26)はおかしいとしている。また、(27)、(28)もおかしな例として挙げている。<sup>17)</sup> 有光では、例の不適切性の指摘にとどまっているので、何故、不適切なのかについて考えたいと思う。

(25) 長くて短い夏休み

(26)? 短くて長い夏休み

(27)? 甘くてまずい焼き芋

(28)? おもしろくて不愉快な人

反義語が共起すればいつでもオキシモロンになるわけではない。また同じ反義語の連続であっても、

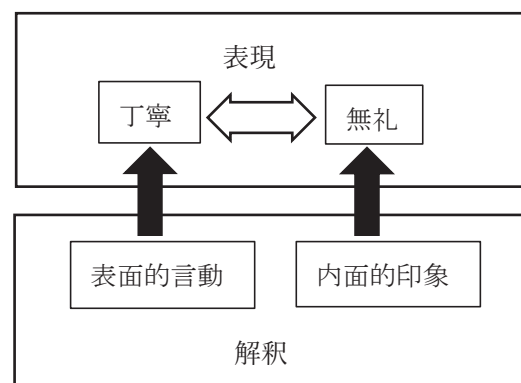
(25) と (26) のように、反義語の出現する順番で容認される場合と容認されない場合がある。これは何故なのか。3節でオキシモロンの分析を示しながら、この理由に言及したい。

### 3. 考察

#### 3.1 オキシモロンを支える我々の経験

この節では、オキシモロンとみなされている例について分析を試みる。

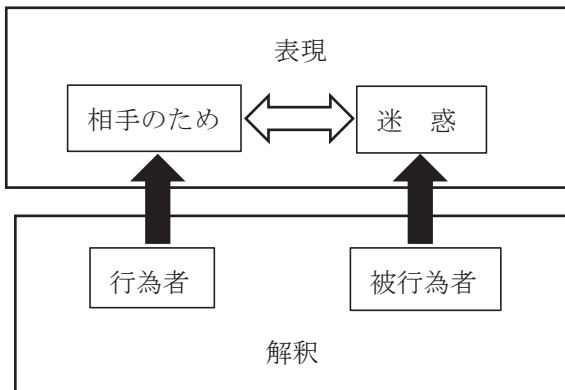
(29) 慇懃無礼



(29) における反対は、見た目の丁寧さと心理的に受け止められる侮辱にある。これらは、「表面的」と

「内面的」と、視点が違う。そして、このようなレベル分けを可能にするのが、相手を蔑んでわざと丁寧な物言いをすることがあるという我々の経験である。このような経験を欠く文化やそのような経験がない子供の場合は、このオクシモロンは理解できないのではないだろうか。(30)も同様の例である。

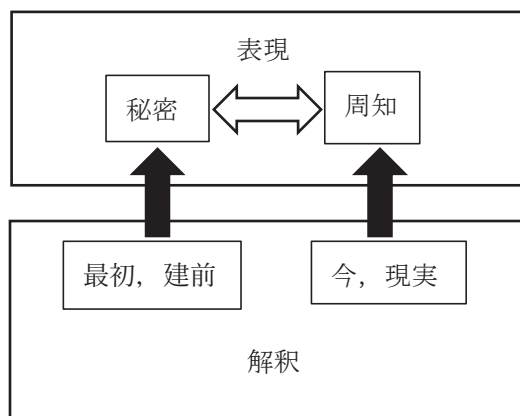
(30) 有難迷惑



ある人が善かれと思ってしたことが、相手にとっては迷惑なことがある。「有難いこと」と「迷惑なこと」はその評価を下す人間が異なるので、矛盾しない。このオクシモロンを成立させ得るものは、好意を好意として受け止められない場合があるという我々の経験である。

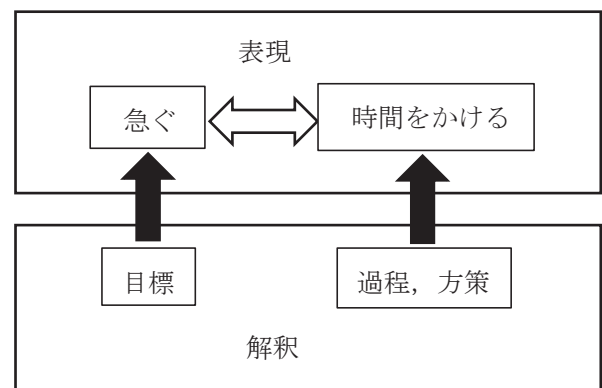
(31)「公然の秘密」では、秘密とされた時点と知れ渡った時点で時間的に差があるので、矛盾しない。あるいは、「建前」と「現実」の違いと言ってもよい。

(31) 公然の秘密

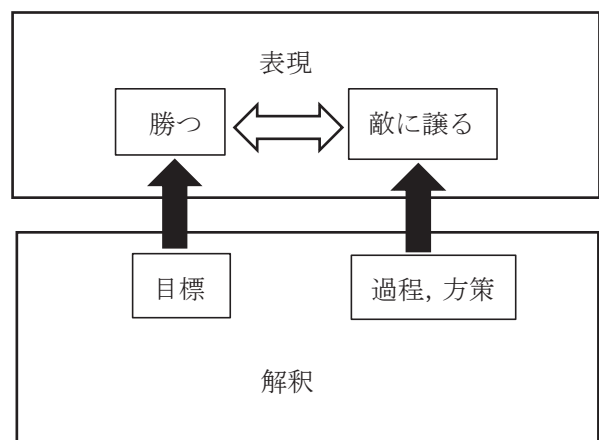


次の(32)「急がば回れ」については、急ぐときは、ふつう早く物事を進めようとするものだが、「急いては事を仕損じる」ということわざに見られるように、敢えてゆっくりと行動した方が事の成就につながるということもある。この経験があるので、これは矛盾した表現にはならない。早くことを成就させたいという GOAL(目標)と、そこにたどり着く PROCESS(過程)と、視点が異なるので矛盾しない。(33)の「負けるが勝ち」も同様である。あくまで「(最終的に) 勝つ」ために「(その過程で) 敵に譲る」のであって、GOAL(目標)と PROCESS(過程)という別の観点で見ているので、矛盾しない。このオクシモロンは、相手に譲った方が良い結果になるという経験に基づいている。

(32) 急がば回れ

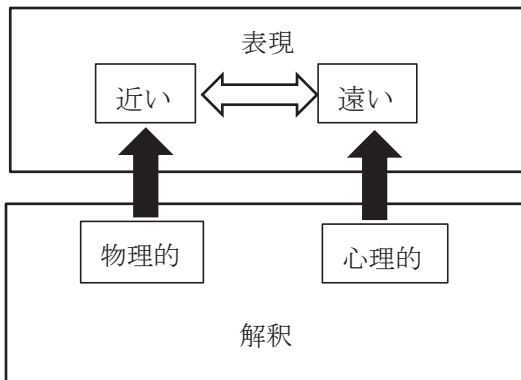


(33) 負けるが勝ち





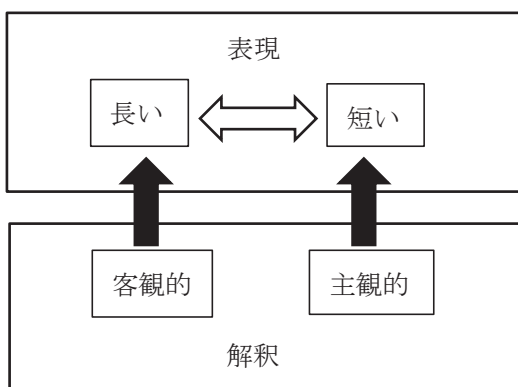
(34) 近くて遠い国



近くにいれば接触が多く、交流もあると思われるのに、むしろ隔たりを感じることもあるという経験がこのオクシモロンの基盤にある。

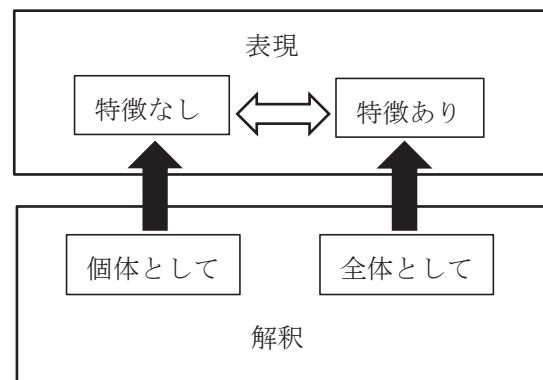
「遠い親戚より近くの他人」という諺もある。この諺は、親戚なら親身になってくれるはずだが、それよりも他人でも近くにいる人の方が親身になってくれるという意味である。「近い」ところにいる人に対する好意の期待を前提にしていると考えられる。また、地理的な距離ではなく、血縁ということで考えても、血縁関係にあって近い存在なのに疎遠であるということになり、やはり「近くて遠い」ということが考えられる。

(35) 長くて短い夏休み



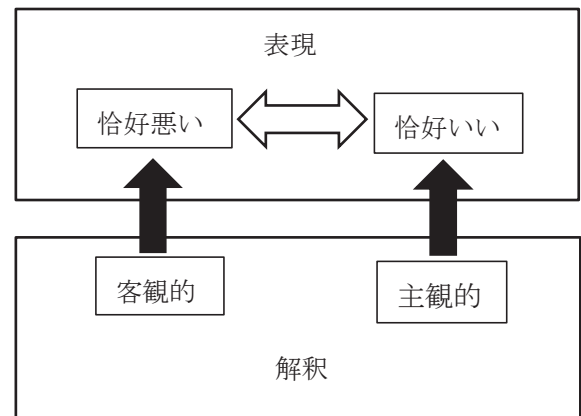
これは、時間のとらえ方についての客観と主観の対立である。そのような客観と主観による時間感覚のずれを我々は経験しているので、矛盾とは思わない。

(36) 特徴がないのが特徴



同じ対象を個体レベルで見ると、他の比較対象も一緒に全体で見るとでは評価が異なってくるということを我々は経験している。

(37) 恰好悪いのが恰好いい



「恰好いい・悪い」の判断は、世間一般と個人による違いということで、矛盾しない。そのようなことがあり得るという経験が、このオクシモロンを支えている。

### 3.2 オクシモロンにならない場合の理由

では、有光が挙げていた反対の語が共起しているがオクシモロンにならず、おかしい表現となる場合について、その理由を考察する。ここに、それらを再掲する。

(38) ? 短くて長い夏休み (= (26))

(39) ?甘くてまずい焼き芋 (= (27))

(40) ?おもしろくて不愉快な人 (= (28))

先ず, (39), (40) の例について述べる. (39) の「甘い」は焼き芋の場合, 「おいしい」にほぼ等しいと考えられる. どちらも味覚を表していて, 視点の違いはここでは考えられない. したがって, 1 つの対象 (焼き芋) に同じ観点での相反する評価が与えられ, 矛盾するのでおかしいということになるのだと考える.

(40) も同様である. 「おもしろい」は「愉快的」とほぼ同じ意味だとすれば, 同じ観点での「愉快的」と「不愉快的」がその人物の評価となり, 矛盾しておかしいということになる.

では, (38) の例について述べる. (38) に比べて, (25) の「長くて短い夏休み」はまったくおかしくない. (35) で筆者が述べたように, 客観的には長い夏休みが主観的には短く感じられるということで, (25) では「夏休み」を異なる視点でとらえている. (38) でも視点の違いを考えることはできるだろうのに, 何故, (38) の「短くて長い夏休み」はおかしいのか.

そこには, 最初の表現が喚起する期待の有無が関わっているのではないかと考える. 「長い休み」と言えば, その期間にいろいろなことができるという期待が生じる. しかし, いざ休みになれば, 何もしないうちに休みは終わってしまい, その短さを痛感することになる. この期待に対する現実の落差を感じた経験がオクシモロンの成立に関係しているのだと考える.

オクシモロンは, そもそも表面上の矛盾する表現を共起させて, 聞き手に一瞬, 何のことかと驚かせるものである. 本稿で述べてきたように, その矛盾は異なる視点によるレベルの違うものだから, 結果的には意味は矛盾しない. 次の瞬間に, 聞き手は, 自分のそれまでの経験からそれがまったく矛盾する訳の分からない表現ではないことを理解し, 成程,

言い得ていると感心するのである. そこにオクシモロンの妙味がある.

「短い休み」の場合, 「長い休み」に抱くような期待は元々, 考えられない. 休みを予想していたのよりも長く感じるようなことがあった場合, そのようなこともあるとは思っても, 期待が外れるというインパクトはない. 期待外れの落差がないので, オクシモロンのような緊張感を伴う表現形式には向かず, それで (38) はおかしいのだと考える.

我々は, 「近くて遠い仲」とよく言う. 同様に, 「近くて近い仲」と言ってもよいはずである. しかし, 我々には「近くて遠い」という表現の方がずっと馴染みがあるし, また, 表現にそれなりの説得力があると思われる. その理由は, 我々が日常の経験として, 近くにいる者同士が何かと助け合って親しくするということをしているからである. そのため, 近くにいるということは, そのようなことが実現されるという期待を抱く. しかし, その期待が裏切られたときのインパクトは大きく, それが効果的なオクシモロンにつながっていく. それに対して, 「遠い関係」の人には, 最初から親しく助け合うというような期待はない. したがって, 「近くて近い仲」には「近くて遠い仲」にあるような期待外れは考えられず, オクシモロンとしては効果的ではないのだと考える.

#### 4. おわりに

オクシモロンが成立するためには, その矛盾する表現を用いたときの対象に対する視点の違いが明らかでなければならない. 視点の違いがなければ, 訳の分からない表現になってしまう. しかし, 視点の違いが考えられても適切なオクシモロンにならない場合がある. それは, 対義語の対の一方から期待が喚起され, もう一方の表現でそれが否認されるということが考え難い場合である.

オクシモロンを適切に理解するためには, 表面, 矛盾する表現が視点を変えれば矛盾しないということに気づく必要がある. そして, そのように気づく



ためには、我々がそのようなことが当てはまると思われる事例について経験から理解していることが必要である。

本稿では、オキシモロンの事例について、それぞれの対義語に考えられる異なる観点を図示することも試みたのだが、最後で述べた、オキシモロンに係する期待とその否認については図示することができていない。これを今後の課題としたいと思う。

16) 注 7) に同じ。

17) 注 3) に同じ。

## 注

- 1) Leech, Geoffrey N., *A Linguistic Guide to English Poetry*, London and Harlow: Longman, 1969.
- 2) 森雄一「オキシモロン管見」, 『成蹊國文』 35, pp. 114-126, 2002 年.
- 3) 有光奈美『日・英語の対比表現と否定のメカニズム 認知言語学と語用論の接点』, 開拓社, 2011 年.
- 4) 伊藤薫「Opposed terms を基にしたオキシモロンの分類」, 『日本認知言語学会論文集』 13, pp. 409-417, 日本認知言語学会, 2011 年.
- 5) 佐藤信夫『レトリックの消息』, 白水社, 1987 年.
- 6) 大森文子「オキシモロンについての一考察」, 『言語文化研究』 20, pp. 65-85, 1994 年.
- 7) 瀬戸賢一『認識のレトリック』, 海鳴社, 1997 年.
- 8) 同上.
- 9) 穂村弘『君がいない夜ごはん』, NHK 出版, 2011 年.
- 10) 注 2) に同じ.
- 11) 佐藤信夫「レトリックと《意味》の弾性」, 『月刊 NIRA』 2 月号, pp.8-15, 1983 年.
- 12) 注 2) に同じ.
- 13) 郡司隆男・阿部泰明・白井賢一郎・坂原茂・松本裕治『意味』(言語の科学) 4, p.99, 岩波書店, 2004 年.
- 14) 注 2) に同じ.
- 15) 森田良行『話者の視点がつくる日本語』, ひつじ書房, 2006 年.

